虚堂智愚と日本僧

佐藤秀孝

元代以降、中国禅林にてほとんど重視されることのない虚堂智愚（一一八五―一二六九）の評価の中で、ただ一つひときわ注目を引く一段に、明の万暦四二年（一六四一）編纂『補続高僧伝』巻一一「虚堂愚伝」の次の記載がある。

先レ是高麗国王請二師於彼国一説法八載還山、問法弟子随侍千指。至二我明嘉靖間一、高麗尚遣二法嗣一来レ此掃レ塔云、彼国法道甚盛焉。

後世の中国諸燈史は一様にこれを受けている。だが、『虚堂録』巻末附「行状」には八年間に及ぶ高麗国行化の事は何ら認めがたく、その出拠を定かにしえない。では、明の嘉靖年間（一五二二―一五六六）に高麗国の法孫が径山に虚堂の墓塔天沢庵を拝登したという記事はいかに理解すべきか。虚堂の下には高麗の禅僧も参学していたであろうが、その門流が後に高麗国中に隆盛した事実は見い出しがたい。これを南浦紹明（一二三五―一三〇八）によって日本禅林に導入された虚堂の法統（大応派）の誤りとみたらどうか。戦国末期、五山の権威は薄れ、永平下の曹洞宗と大応派の臨済宗は林下の大門派として形成されている。この頃、渡明した大応派の禅僧が問題となるが、いまはこれを定かにしえない。

虚堂は高麗や日本に渡ることはなかったが、ようやく頻繁になり出した日宋間の禅僧の往来を通して、初期の日本禅林に深い関わりを持つ。ただ前半生においては、古く参学期に永平道元（一二〇〇―一二五三）との擦れ違いが注目を引く程度で、文献上見い出しえない。その関係はまさに彼の無準師範（一一七七―一二四九）の示寂とともに始まる。いったい師範は多くの日本僧や来日僧を育成して日本禅宗史上にも不動の影響を及ぼした。だが師範を失って、次の世代の入宋求法僧の参学対象が動揺する。新たにこれに匹敵しえる人物の散策に乗り出すのである。そんな師範示寂と同じ淳祐九年（一二四九）、虚堂は婺州（浙江省）雲黄山宝林禅寺を退き、杭州霊隠寺の松源塔下（鷲峰庵）に隠閑、実に八年もの間、世縁を杜絶する。それは蒙古の侵入など強寇の難に遭遇した為というが、裏に官僚との不和があり、禅者の貴族化、官僚化へ

の憤りも込められていた。極めて孤高な隠閑であったらしく、にわかに立場が高揚し、慕う人々が参集する。その始めは霊隠寺の大川普済（一一七九―一二五三）の下で『五燈会元』を編した雪窦慧明、続いて石林行鞏（一二二〇―一二八〇）・冰谷衍（―一二六七）・横川如珙（一二二二―一二八九）ら法従弟が祖塔を守る虚堂を訪い、無準下の末弟たる無学祖元（一二二六―一二八六）もこの時期に虚堂の接化でより円熟し、常に「老虚堂」と尊称している。また普済の後席を継ぐ曹洞宗の東谷妙光（―一二五三）が虚堂に立僧普説を請うなど、この時期を契機に虚堂は禅林の第一人者への道を歩むのであり、日本僧の来参をも招くことになる。

虚堂に参じた最初の日本僧として、その可能性の存するのは無本覚心（一二〇七―一二九八）である。ただ「法燈国師行実年譜」など諸伝はこれを伝えず、『本朝高僧伝』巻二〇のみが帰国に際して婺州宝林寺に虚堂を訪ねたとする。これはおそらく編者卍元師蛮（一六二六―一七一〇）が『虚堂録』巻四の「示二日本国心禅人一」を基に付加した記述とみられる。ちなみに『虚堂録』の古註は心禅人を大川下とされる海月明心なる人物に当てているが、なお曖昧である。ただ宝祐二年（一二五四）帰国の直前とするなら、婺州ではなく杭州霊隠寺の鷲峰庵でなければならない。覚心の師無門慧開（一一八三―一二六〇）と虚堂は文献上、直接の関わりはないものの、『無門関』と松源崇岳（一一三二―一二〇二）の関連や、慧開の住地護国寺が同じ杭州にあり、慧開下の無伝祖が虚堂に参じており、また鷲峰庵がのちの由良興国寺の山号鷲峰山と一致することなどより、覚心の来訪は十分可能である。

この後、虚堂は阿育王山の住持に就くが、宰相呉潜との不和で育王を追われ、東山・金文山（栢巌寺）・雪竇山と再び隠閑の身となる。雪竇の明覚塔下を自らの終焉の地とまで定めて、学人接化に一層の拍車を加えるのである。そして何故か不遇な虚堂の下に日本僧の来訪参学が続いている。紹明のほか、径山の石渓心月（―一二五六）の法を嗣いだ無象静照（一二三四―一三〇六）が心月亡き後、明覚塔下に虚堂の提撕を受け、帰国に際しても虚堂を浄慈寺に訪うている。また巨山志源も虚堂に「日本源侍者游二台雁一」の偈頌があり、雪竇閑居期にはすでに参じていたものとみられ、浄慈寺語録を編した侍者至源をこの人に仮定し得る。虚堂の法を嗣いで帰国し、鎌倉禅興寺に住し、無学祖元やその法嗣規庵祖円（一二六一―一三一三）と交遊を結んでいる。

また注目すべきは建長寺の蘭渓道隆（一二一三―一二七八）の門人の来訪である。虚堂に「示二日本智光禅人一」の偈頌が存することから、かつて道隆の鎌倉常楽寺での語録を編したことで知られる智光が、ほぼ志源と同じ頃に虚堂に謁したことが窺え、ついで道隆の語録を携えて禅忍と直翁智侃（一二

四五―一三二二）が入宋し、開版に際して虚堂に跋を求めている。その開版には虚堂下の東州惟俊も天台山万年寺の首座として関与しているが、裏にかなりの人間関係が蠢いていたらしく、智侃は語録の校定を虚堂に得たことで、帰国後、道隆の激怒を買い、その門を離れて東福寺の円爾（一二〇二―一二八〇）の法を嗣いでいる。虚堂と道隆との間に何らかの確執が存したのかもしれない。

さらに浄慈寺入寺まもない時期には、わが永平下の寒巌義尹（一二一七―一三〇〇）が道元の語録を携えて入宋、瑞巌寺の無外義遠の校定を得て跋を虚堂に求めている。来訪の理由は古く虚堂が浄慈寺の長翁如浄（一一六三―一二二八）に参学している事実にあるらしく、その帰国が紹明と同じ咸淳三年（一二六七）であることから、義尹は久しく虚堂の下に在ったのかもしれない。このほか『延宝伝燈録』巻六に寂庵上昭（一二二九―一三一六）が紹明・静照・樵谷惟僊・約翁徳倹（一二四四―一三二〇）らと虚堂に参じたことを伝える。入宋時期から上昭・惟僊の訪遊は可能であるが、蘭渓下の徳倹の場合、虚堂寂後の入宋らしく、その参学は認めがたい。

晩年の虚堂は自意に反して、浄慈寺・径山と勅住し、世事に追われる中、十分な接化を為しがたい辛い毎日を送っている。そんな晩年を救う人物としてわが南浦紹明の入宋求法は、虚堂の生涯で見過すことのできない重要な役割を為している。いったい虚堂ほど南宋の末期社会にあって、蒙古民族（元）の南下を目前にし、仏祖道の履践と王室官僚との交際の狭間に苦労した禅者も希である。そんな中で、同じ松源下の道隆やかつての参師如浄の門人道元の仏法が日本に盛んであることを実感した虚堂が、また自らの法門の隆盛を日本に願ったとしても不思議はない。虚堂は中国社会の混乱とは別次元の日本僧紹明との邂逅を喜び、自らが師の運庵普巌より受けた「古帆未掛話」をもって紹明を接化し、「大唐国裡無二人会一、又却乗レ流過二海東一」の偈を与えている。紹明を日中を超えて評価した偽らざる心情であったとみてよい。紹明が虚堂門下など中国僧にも一目置かれていたことは、虚堂の「日多記」とともに、日本への期待を込めて送られた四三人の別れのことば『一帆風』一篇の偈頌集に語られ、その序は咸淳三年冬に茗渓（浙江省）の人、雪篷慧明が題している。虚堂門下は多く江浙の禅刹に住しているが、最晩年の愛弟子たる霊石如芝（一二四五―一三三五？）を除いて、中国僧で禅林に名ある後継者は育たず、元朝に入ると松源下の本流は古林清茂（一二六二―一三二九）などに移る。時世は宗風を左右する。あるいは虚堂は法門の零落を察知していたのかもしれない。しかるに日本では紹明の系統（大応派）が着実に門流を展開しており、虚堂の禅はまさに海東を過ぎたといえるのである。〔註略〕

（曹洞宗宗学研究所所員）